

2017年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

ほしきものなど無けれども宝船
大地に日あふれ建国記念の日
二の替声の華やぐ大向う
日に透ける蕊の先まで梅日和
言葉にはならぬ思ひも寒見舞

藤沢 藤田 富子

散るもみぢ鮮やかなるを葉にと
住む人の無き庭落葉散り敷けり
冬霞スカイツリーをつつみをり
足繁く通ふ小春の小買物
酔客の背なおでん屋ののれん越し

町田 小森 まさひこ

山肌の雲影もしや雪女
展望の下に凍てつく湖と森
オリオンに月重なればさらに凍し
梅の木に流れに春の兆しあり
なごり雪二十二歳の時をふと

2017年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

食べたくもあり食べたくもなき田螺
ひとつ去り春の愁のまたひとつ
惜しみつつなほ大胆に剪定す
泡を吹く穴への期待汐干狩
パラボラに宇宙の風の光るかな

藤沢 藤田 富子

露の臺土手に花芽をのぞかせて
二月礼者の曾孫生まれをよろこびぬ
まんさくの光古刹の道を占む
三寒に気のゆるされぬ昨日今日
鶯の笛冬の波間に低くあり

八王子 石井 蓉子

水仙が春すぐそこと告げており
青空に白梅紅梅咲初むる
夕暮れやなんと日脚の伸びたこと
一人居に雛菓子切なくも甘し
ランドセルの真新しきが通り過ぐ

町田 小森 まさひこ

荒天に集ひし忌日のあたたかし
放置さる広き空き地に鳴くびばり
種蒔くや点となりたるトラクター
横山の色の移ろひ春闌ける
老鶯の鳴き継ぐ道をたどりゆく

2017年5～6月掲載分

2017年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

ひとひらの揺れてひとひら散るポピー
まっすぐに泳ぎにくさうなる金魚
けだるき香立て山梔子の花の錆
絞り出す気力を焼きつくす暑さ
ビル群は首都の幻想夏霞

藤沢 藤田 富子

行楽の戻り渋滞花曇り
古民家の藁屋根ゆらり陽炎へる
沈丁の香りほのかにひろごれる
初花の下に寄り添ふ道祖神
のどけしや嬰兒は母に知恵増せり

八王子 石井 蓉子

春の雨静かな静かな日曜日
三年の日々を思へば桜咲く
一人居の家事進みゆく春の朝
さえずりの部屋に飛び込む朝かな
山なみを近くに見せて光る風

町田 小森 まさひこ

翡翠の色を残して飛びゆけり
改めて思ふ憲法記念の日
メーデーや年俸契約すませけり
卯波打つ太平洋を刺す岬に
俳聖の乗船の地の出水かな